

あくまでも“小嶋ミク”でありたい 結果としてそれがBAND-MAIDを唯一無二のバンドにすることに繋がれば嬉しい

——小嶋さんは幼少期、どんな家庭で育ったんでしょうか？

小嶋：ちょっと複雑というか、両親が再婚の家庭だったんです。それにお兄ちゃんが1人いるんですけど、異父兄弟で11歳も年が上で。ただ、お兄ちゃんとはそれだけ年が離れているにもかかわらずしょっちゅうケンカをする仲で(笑)。でも、そうやってお兄ちゃんからケンカの仕方を教えてもらったりしていました。パンチの仕方とかを教わったり(笑)。

——お兄さん…(笑)。ということは、小嶋さんもわりと活発な子だったんですか？

小嶋：そうですね。小学校の頃は男の子と一緒にチャンバラをするような子でしたし、夏にはセミやカブト虫を獲りに行ったりとか。駆けっことか大好きで、「広いところを見るとすぐに走り回っちゃうからすごく大変だった」とお母さんがよく言っていました。家からもよく脱走していましたしね(笑)。こっそり抜け出して遊び回った結果、マンションの階段から転げ落ちてたんこぶを作って帰ったりとか…(笑)。髪もずっとショート・カットだったので、見た目も性格も男の子みたいなお子でした。——今の女の子らしい姿からすると少し意外ですね。ということは、学校の科目の中でも体育が得意だったり？

小嶋：体育と音楽が好きでした。音楽が好きになったのはおばあちゃんの影響ですね。おばあちゃんがずっと演歌のカラオケ教室に通っていて、市民ホールや公民会館みたいなところで発表会とかをしていたんです。小嶋もその教室に小学校2年生の頃くらいから付いて行っていたので、最初に覚えた曲が天童よしみさんの「珍鳥物語」で(笑)。そこから音楽や歌うことがすごく好きになりました。ただ、さすがに周りで演歌を歌っている子なんて1人もいなくて、演歌ばかり歌っている小嶋を見てお母さんがちょっと心配になったらしく、「もっとモーニング娘。とかを聴きなさい」と言われたんです(笑)。それでモーニング娘。さんとか松浦亜弥さんとかも好きになりましたね。あと、お母さんの影響でEvery Little Thingとか宇多田ヒカルさんとかも聴くようになって、徐々に聴く音楽のジャンルが広がっていきました。

——子供の頃から音楽に親しんでいたんですね。ロックに目覚めたのはいつ頃ですか？

小嶋：高校生のときに周りの子たちがバンドをやり始めたり、仲の良い子がバンドの追っかけをしている子だったりしたんです。それである

とき、その仲の良い子から「良かったら一緒にライブを観に行こうよ」って誘われて観に行き始めたことでバンドを知ったんです。——そのとき友達に誘われて観に行ったのはどんなバンドだったんですか？

小嶋：有名なバンドとかではなくて、自分たちで企画ライブをやる感じのコピー・バンドで。プロのライブじゃなくて、そういうすごくミニマムな世界から入ったんです(笑)。確かそのバンドはELLEGARDENとかのコピーをしていましたね。そこでバンドというのを知ったけど、小嶋がそれまで聴いてきた音楽とあまりにも違っていたので、「自分もバンドを組みたい」と思うまでにはなりません。でも、「バンドって面白いな」と思うようになっていろいろと調べたんです。そうした中で東京事変さんの音楽と出会って、「うわぁ、こんなにカッコ良い音楽があるんだっば！」って衝撃を受けたんです。

——ということは、東京事変と出会ったことでバンドを始められたんでしょうか？

小嶋：いえ、実はちょっと事情があって、そのときにバンドはやらなかったんです。というのも、小嶋が中学生のときに親が離婚しちゃって…お父さんがどこかに飛んで行っちゃったんです(笑)。親嶋だから、バタバタって(笑)。——え…ええっ？

小嶋：それでお母さんとおじいちゃん、おばあちゃん、お兄ちゃんと「お父さん、飛んで行っちゃったねー」って話しながら暮らし始めたんです(笑)。ただ、どうしても生活がそれ以前より厳しくなるじゃないですか。だから、ちゃんと勉強して国公立とかの高校に入ろうと。そういう状況の中で音楽が好きになったので、「音楽を真剣にやりたい」という気持ちが芽生えつつも踏み出せずにいたんですね。でも、親に内緒で県外にもオーディションを受けに行ったりしていたんだっば。しかも、「次が最終審査です」というところまで進むことも何回かあって。それで、バイトで溜めたお金で東京までオーディションを受けに行ったりもしていたんです。そうしていたら、どんどん我慢できなくなったんです(笑)。

——分かります。もしオーディションを受けても落選が続くようだったら諦められたのかもしれませんが…。

小嶋：そうなんです。オーディションを通して「やっぱり東京に行きたい」という気持ちがどんどん高まって。だからバイトを何個も掛け持ち

して上京する資金を溜めて、自分の誕生日に「大学まで行かせてもらって申し訳ないけど、東京に出たいです」とお母さんに話しました。大学を退学する書類とかも後は印鑑を押すだけって状態にした上で、「東京に行ったらここに住んで、こういうところでバイトをしながらこのボイス・トレーニングに通う」とプレゼンしたんです。まぁ…当然なんですけど、自分の誕生日にお母さんを泣かせてしまうことになって(苦笑)。

——内緒で動いていただけにビックリされたんだと思います。それでも自分で上京を決めて実行したんです。

小嶋：私は当時も今もやりたいと思っただけに行動しちゃうタイプで、しかも行動し始めると止まらなくなっちゃうんです。東京に来たからはちゃんと歌を勉強しようと思って、お母さんにプレゼンした通り、バイトをしながらボイス・トレーニングに通い始めました。バイトを始めたお店はメイド喫茶で、歌とかを自分たちで披露するようなお店だったから歌の練習にもなって良かったんです。それに熊本にいたときからメイドさんのバイトをしていたので、せっかく東京に出るなら本場・秋葉原でもやってみたいなと思って(笑)。

——“音楽を真剣にやりたい”という気持ちは持ちつつ、その頃はまだ“バンド”の発想に至っていないわけですよ。どのようにしてBAND-MAIDは結成されたんですか？

小嶋：“音楽をやりたい”と決めてからいろいろ経験をしていく中で知り合いがどんどんできて、その繋がりです。地下アイドルを作るので良かったら協力して欲しい」という話をもらったんです。それで私も1年間くらい地下アイドルとして活動したんです(笑)。ただ、本当にアイドルらしい可愛い曲を歌う中で“あっ、これじゃない”と思ったんです(笑)。嫌とかじゃなくて、“自分のやりたい音楽性とは違うな”って気付いたという。それで地下アイドルは1年でやめさせてもらって、自分がやりたい音楽をやろうと今の事務所に履歴書を送ったら、「一度話をしましょう」と返してくれたんです。で、実際にお会いして「今までこういうことをしてきました」と話をしたところ、「バンドとかには興味ないの？」と言われたんです。なので、「バンドは好きだし、東京事変さんにも憧れています。それに可愛い音楽よりもカッコ良い音楽がやりたいです。でも、メイドも好きです」という話をしたんですね。そうしたら、「メイドとバンドを合わせたら面白いね」「じゃあ

混ぜちゃいましょう」と(笑)。

——小嶋さんの辿ってきたものを集約したのがBAND-MAIDだったんですね。メンバーはどうやって探したんですか？

小嶋：最初は小嶋がボーカルで、他のメンバーを探すことになったんです。そんな中でまずKANAMIがYouTubeに上げていた演奏動画を見つけて、事務所を通じて連絡を取っていただきました。そうしたらKANAMI、AKANE、MISAと結構スムーズにメンバーが揃っていったんです。ただ、その時点で事務所が用意してくれた曲があったので、すぐにメンバーでリハーサルをしたりお給仕をやってみただけで、どうにもしっくり来なくて。それで“もう少し小嶋と対照的な声の子をボーカルとして迎えたなら面白いんじゃないか”というアイディアが出てきたんです。小嶋自身も“ツイン・ボーカルにすればバンドがもっと映えるっば”と思ったので、そのとき事務所に所属している子ほぼ全員くらいに声を掛けてオーディションをしたんです。それで最後に見つかったのが彩ちゃん(彩姫)でした。

——運命的な出会いを果たされたことが分かります。ただ、その時点で小嶋さんはギターを弾いたことがなかったわけですよね？

小嶋：はい、まったく弾けなかったですね。もともとボーカルとしてステージに立っていたので、彩ちゃんが入ってからでもギターを持たずに2人で並んで歌うようにしてみただけですけど、どちらかがギターを持てばバンドのバランスが良くなるよねって話が出たんです。それで彩ちゃんに持ってもらうなら…ちょっと似合わなすぎて(笑)。「じゃあ、小嶋が持つっば！」と。

——一見“2ndボーカル&2ndギター”というポジションで、ラクな役割だと思う人もいるかもしれませんが。でも、彩姫さんに合わせたKeyでコーラスをしつつ、作曲者でありギターの師匠でもあるKANAMIさんが考えたフレーズを弾くのって、実は相当大変ですよ。

小嶋：たぶん「小嶋が持つ！」って言ったときはそこまで考えていなかった(笑)。それに最初はそれほどちゃんと弾く感じでもなかったです。ただ、メンバーでBAND-MAIDの音楽性を探っていくうちにどんどん今の様な重い方向に変わっていった、小嶋ももっとちゃんとギターを弾かなきゃいけなくなっていきました(笑)。

——バンドの変化に合わせてしっかりとスキル・アップしていくこと自体が、そもそもすごいことなんですけどね(笑)。それにBAND-

MAIDでは歌詞も書かれています。

小嶋：最初は事務所が用意してくれた曲をやっていましたけど、メンバー間で「自分たちでどんな曲を作れるようになりたいね」と話したんです。それでもともとシンガー・ソングライターとして活動していたKANAMIを中心に曲作りをやっていくことになって、歌詞はみんな書いてみようということになったんです。まずは小嶋と彩ちゃん、KANAMIの3人で何曲分か歌詞を書いてみたんですけど、KANAMIの書く歌詞がすごくメルヘンだったというか…。確か“犬が死んじゃった…”みたいなテーマで、なぜか歌詞の書いてある紙にお墓のイラストも描いてあったんです(笑)。それで「死んじゃったんだね。悲しい物語だね。でも…これはちょっとBAND-MAIDの方向性じゃないよね…」と(笑)。一方彩ちゃんは、「書きたいことはあるけどそれを言葉にするのが難しい」と言っています。そういう点で小嶋の書いた歌詞が2人の間を取っていたみたいで、「じゃあ歌詞は小嶋が書こう」ということになったんです。

——歌詞を書く上で大事にしているのはどういったことでしょうか？

小嶋：歌詞を書くときはまず曲を聴いて、聴いているときに思い浮かんだイメージと合う題材を探るようにしています。映画を観たり、小説を読んだり。例えばネットで「泣ける映画」みたいなフワッとした感じで検索したとしても、いろいろ出てくるじゃないですか。そういう作品を観たりして、インスピレーションを受けてから書くことが多いです。映画の中の1シーンを自分なりに昇華させて書くこともあります。大変な面ももちろんあるけど、そうやっていろいろと考えるのが楽しいです。

——インタビューをするたびに感じるのですが、小嶋さんはギターにしてもコーラスにしても作詞にしても、バンドにおける自分の義務だと思わずに楽しんでますよね。

小嶋：たぶん義務だと考えるとやりたくなくなっちゃうタイプなんです(笑)。小学1年生くらいのとき、オルガン教室にちょっと通わせてもらったことがあって、自分がやりたくて行き始めたんです。で、「これをやりなさい、あれをやりなさい」と言われた途端にイヤになってやめちゃったんです(笑)。でも、教室に通うのをやめた後の方が自分で教材を見ながら好きに練習をしたりして楽しかったんです。BAND-MAIDで自分がやっていることも同じで、全部自分がやりたいことだから楽しめるん

です。

——だからこそ、例えば一歩下がったポジションにいるときでも他のメンバーに引けを取らない輝きが発せられるんでしょうね。

小嶋：は、恥ずかしいっば(笑)。なかなか褒められることがないので(笑)。確かに大変さはあるけど、小嶋にとってBAND-MAIDが初めて組んだバンドなので、いわゆる“普通のバンドのあり方”とかをあまり知らないんですね。だから、BAND-MAIDで自分がやるべきことを一生懸命やっているだけなんです。

——そういう小嶋さんにメンバーやスタッフのみなさんは本当に感謝していると思います。

では、BAND-MAIDで活動してきた中で転機になった作品や時期などを挙げておきますか？

小嶋：ゼマイティスのギターを持つようになったのはすごく大きいと思います。自分の中でギターを持つことの意味が変わったんです。ゼマイティスのギターは何というか…ちゃんとしたギタリストの方が持つものだと思っていて、今の小嶋が到底持てるものじゃない。だから、もっとギタリストとしてちゃんとしなきゃいけないって改めて思えたんです。

——ストイックな小嶋さんらしいですね。では、小嶋さんがバンド内で担っている役割はどういうものだと考えていますか？

小嶋：何だろう…イジられ役？(笑) イジられすぎてメンバーに怒ったこともあるんですけど、キレたこともまたイジられるんです(笑)。あと、男っぽいとも言われます。わりとサバサバしているし、あまり人と行動を共にしなかったりするんです。自分がやりたいと思ったことをやるタイプなので、例えば「ツアー中のオフ日にみんなでどこかに行こう」とか「みんなでご飯を食べよう」って話になっても、「小嶋はここに行ってみないから、1人で行って来るっば」とフラフラと行動したりするんですよ。自分が果たしている役割はあんまり分からないけど、そういう小嶋を許してくれるメンバーが揃っていることに感謝しています。

——なるほど。そんな小嶋さん自身が目指す理想のミュージシャン像とは？

小嶋：小嶋には“この人みたいになりたい”というのがないんです。あくまでも小嶋は“小嶋ミク”でありたい。自分らしさを大事にして、他の人がマネできない人になりたいですね。そういう唯一の存在になりたいし、結果としてそれがBAND-MAIDを唯一無二のバンドにすることに繋がれば嬉しいです。